



(4) 名前のない新聞 No.209 / 2019年1・2月号

遠藤 暁及

危険な道楽、アースキャラバン(4)

—バングラデッシュの
少数民族仏教徒—

← 里親からの手紙を読む子どもたち



↑ 事務所でのミーティング

← 里親からの手紙を読む子どもたち

↑ 事務所でのミーティング

アースキャラバンは、長崎・広島から自転車で「平和の火」(原爆の残り火)を東京まで運び、その後、ヨーロッパや北米を経て、中東のエルサレム・ベツレヘムに向かう世界巡礼イベントである。

その間、仏教、キリスト教、イスラム教、ユダヤ教、アメリカ先住民など、様々な宗教の人たちと共に祈り、ピースコンサートなどのイベントを各地で行う。

NPOの支援活動としては、ガザに脱塩浄水器を設置したり、バングラデッシュで仏舎利塔の修復や、少数民族仏教徒のための小学校を3つ運営している。

バングラデッシュの小学校運営はすでに10年ほどやって来た。世界巡礼イベントは2015年からで、これがもう4年になる。

どちらも挫折せずに続けて来れたのは、世界各地のメンバーが、献身的に手弁当で動いて下さっているからに他ならない。正直言って、これはもう奇跡を体験しているみたいなものだ、と思っている。

僕にしてみたら、自分を捨てて、他者のため世界のために、物惜みせず動いている人との出会いほど、喜びを感じるものはない。実は、そんな人と出会いたくて、世界各地をウロウロしているようなものである。

バングラデッシュには、ほぼ毎年行って活動している。現在、僕らが支援しているのは、イスラム教国バングラデッシュの中では、少数民族のラカイン仏教徒たちだ。

場所は、ミャンマーにほど近い地域で、ダッカからは車で12時間かかる。チタゴンから南は仏教徒エリアで、国際支援があまり入

らない辺鄙なところだ。

実は、チタゴン丘陵の仏教徒たちは、長年に亘り、バングラデッシュ軍とベンガル人入植者たちによる土地の強奪、家屋破壊、殺害、レイプなど、様々な被害を受けて来た。

それは過去のことでない。現在も尚、続いている。チタゴン丘陵のわが仏教徒たちは、パレスチナ人と同じ状況に置かれているのである。

僕らがこれまで支援して来たラカイン仏教徒たちが住むコックスバザールは、そこから車で数時間離れたところにある。彼らは、チタゴン丘陵ほどシビアな状況ではない。せいぜい、数か所の寺院が放火されたことがある、といった程度(!?)である。

それでも、イスラム教国のバングラデッシュの中で生きるラカイン仏教徒たちが、未来に希望を持つには子供たちに高等教育を与えるしかない。

このためNPOアースキャラバンは、約10年前に、彼らの教育支援を始めたのである。

世界最貧国と言われ、国の運営自体が海外からの援助によって成り立っているのが、バングラデッシュだ。このような国で支援活動するという事は、一歩間違えれば、援助を受け慣れた「クレクレ君」たちばかりになってしまう可能性がある。

幸いアースキャラバンは、「クレクレ君」たちと付き合うという状況に陥らず、支援を継続してこれた。それは、気高い精神を持ちながらもお人好しで、子どものようにどこか「抜けている」ラジョーさんと一緒にやって来れたことが大きい。

ラジョーさんの一族は、もともと広大な土地を所有するラカイン王国の末裔だった。ラカイン王国とは、今のミャンマー・バングラデッシュが植民地化される前、両国にまたがるように存在していた国だ。

古くは釈尊の時代から存在していたが、大戦後、インド、ミャンマー、東パキスタン(今のバングラデッシュ)がイギリスから独立する際、なぜかミャンマーとバングラデッシュに分断されてしま

った。言わば悲劇の国である。彼らは、クルド人のように、国を失った民なのである。

イスラム教国バングラデッシュで、迫害や差別を受けながら耐え忍んで来た仏教徒たち。性格的にも自己主張が強いベンガル人たちの中で生きている彼らは、性格的にも穏やかだ。あまり自己主張をせず、言いたいことも言えないような人たちが多い。

コックスバザールでも、信仰の対象である仏舎利塔を、ベンガル人たちに汚され、土地を不法占拠されたあげく仏舎利塔が倒壊する、などの被害にも遭っている。(このためNPOアースキャラバンで、現在、仏舎利塔公園を管理している。)僕たちアースキャラバンは、シャイで控えめな少数民族仏教徒たちを支えてあげたくて、支援活動を始めたのである。



1月のバングラデッシュでは、現在、運営している3つの学校だけでなく、新たな村を訪れて調査し、孤児たちにも面接する予定だ。それは、日本や欧米の里親を探し、より大きく支援を発展させていくためだ。

また、村長や先生たちとも会って、さらに教育を充実させて行く道を探っていく。もっとも、彼らに「何かご要望はないですか?」と聞いても、もじもじして、なかなか言わないことが多い。

話を終えて、次の村に向かおうという時間になって、ようやく、「子どもたちに制服を作って上げたいんだけど...」とか、「遠足に連れて行って上げたいんだけど...」などと口を開いたりする。やはり仏教徒たるものは、どこまでも奥ゆかしいのだ。

← 子供達

